

いもう 葦毛通信



サルトリイバラの実

2021年12月20日
豊橋市文化財センター
豊橋市松葉町3丁目1
TEL: 0532-56-6060

No. 118

1、ムカゴニンジンの訪花昆虫

葦毛湿原では今年ムカゴニンジンが分布を広げF地点の旧水田部分で大きな群落になり、秋には多くの花を咲かせました。昨年は水田の最下段中心でしたが、上段と中段の旧水田にも広がりました。ムカゴニンジンと共にミゾソバも見られますが、ムカゴニンジンに多くの昆虫が来ています。

ムカゴニンジンに集まる昆虫については、葦毛通信 No. 102 でキアゲハの幼虫に食べられてしまったことを報告しました。多くの花が食べられてしまいましたが、キアゲハの羽化後ムカゴニンジンは復活して再度花を咲かせ、またキアゲハの幼虫が発生して2度目の羽化がありました。今年はキアゲハの幼虫は少なく多くの花を咲かせました。

今年は多くの花を咲かせたためか、多くの種類の昆虫がムカゴニンジンの花を訪れています。葦毛湿原ではノリウツギに多くの昆虫が訪れ葦毛通信 No. 5 でノリウツギに集まる虫たちと題した簡単な報告をしました。ノリウツギではカミキリムシやハナムグリを紹介しましたが、十分に調査して報告した訳ではありませんでした。今回も専門的な調査をしたわけではありませんが、9月下旬にムカゴニンジンに多くの昆虫が来ていることを確認したので、延べ4回写真を撮りました。種名については専門家ではないので間違っているかもしれません。



ムカゴニンジン開花状況（2021年10月2日）



キゴシハナアブ (2021年10月3日)



ホシメハナアブ (2021年10月3日)



オオヒラタハナアブ (2021年9月25日)



オオハナアブ (2021年10月2日)



キンバエ亜科? (2021年9月22日)



チュウレンジバチ (2021年9月25日)

最も多かったのは双翅目のアブ・ハエの仲間でした。キゴシハナアブ、ホシメハナアブ、オオヒラタハナアブ、オオハナアブ、キンバエが確認できました。また、種名がよく分からないものも少数あります。



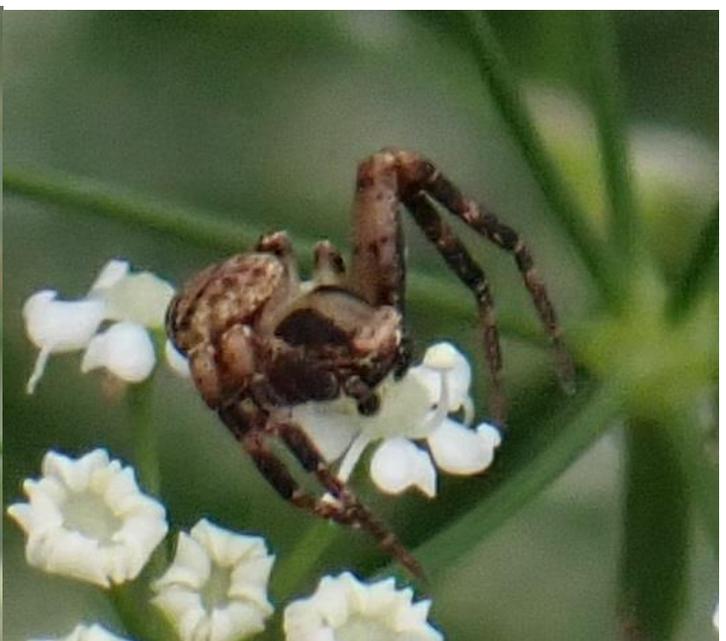
クロウリハムシ (2021年9月22日)



アカスジカメムシ (2021年9月25日)



コアオハナムグリ (2021年9月22日)



クマダハナグモ? (2021年9月22日)

アブ・ハエの仲間以外には、クロウリハムシ・コアオハナムグリ等の甲虫、チュウレンジバチ、アカスジカメムシ、ハナグモの仲間(クマダハナグモ?)が見つかっています。今回は4回写真撮影を行いました。各回15分程度の短時間です。本格的な調査を行えばもっと多くの昆虫が確認できると思います。

ノリウツギやムカゴニンジンのように多くの花を咲かせる植物は多くの昆虫を引きつけるのかもしれませんが、コオニユリやホソバリンドウのように個体数が少なくなり、ポリネーターによる受粉がうまくいかない植物も見られます。葦毛湿原ではこのような植物は人工授粉をして対処しています。

植物を保護するためには、花粉を運んでくれる昆虫(ポリネーター)は必要不可欠です。**植物とポリネーターは密接不離のもの**としてセットで保護していかなければ、植物を保護していくことは出来ません。単に個体数や開花数を増やすだけで種子ができなければ、継続的かつ安定的な環境にはなりません。葦毛湿原では、多くの花が咲くだけでは無く、種子ができ、確実に世代交代が進むようにポリネーターの保護も視野に入れて多様な**環境の復元**を目指しています。

2、ナガバノイシモチソウの倍数体

1) 倍数体の出現

昨年(2020年)に第7地点で他の個体より2倍程度の大きさで明らかに大きい個体が見つかりました(右写真)。豊橋のナガバノイシモチソウ自生地では初めて確認された個体ですが、2倍体あるいは3倍体のような倍数体と考えられます。昨年、報告することができなかったので、今回報告します。

ナガバノイシモチソウは茎から数枚の補虫葉を出すと1本の花茎が出て1~5輪程度が開花し、さらに数枚の補虫葉がでて次の花茎が出るという成長サイクルを繰り返します。種子ができ種子散布が終わると補虫葉と花茎は枯れて茎も倒れ込んで行きます。つまり、高さはあまり変わらず倒れ込んで横に移動しながら成長し、花茎は常に3本程度が残っている状態です。

倍数体は2020年11月3日に気が付き、5日の葦毛湿原保護意見交換会で専門家に見ていただき、2倍体であるという意見をいただきました。この時は、花茎が出ておらず、花茎をつくらず栄養分をすべて成長に回していると思いましたが、12月2日に初めて花茎を確認しました。

しかし、ツボミはありますが花茎は伸びず、このまま開花せずに終わりました。

他の個体はすでに開花も終わり、枯れている状態でしたが、この倍数体は成長を続け、最後に1本の花茎から5個のツボミをつけました。成長と花茎をつけるパターンが明らかに他の個体とは異なっていました。本来、熱帯起源の植物なので12月で気温が低くなり成長の限界を超えたと思われます。気温が高ければ開花したのか、あるいは3倍体であれば種子をつけず開花しないのかは分かりませんが、この個体は種子を形成することもなく、豊橋のナガバノイシモチソウの遺伝的多様性に悪影響を及ぼすことはないようです。



2倍体(2020年12月2日)



先端部分(2020年12月2日)



成長点近くの花茎(2020年12月2日)

今年(2021年)では、倍数体は確認されていません。2020年のこの一個体のみです。